

[教育実践報告]

全学必修科目「アカデミックスキルⅠ，Ⅱ，Ⅲ」実施報告

渡 邊 淳 子

Report on Teaching Academic Skills I, II, III : Compulsory Courses for All Students

Junko WATANABE

要旨

本稿は、初年次教育の一環として熊本保健科学大学で2019年度から開講されている全学必修科目「アカデミックスキル」の実践報告である。「アカデミックスキル」は1年次前期から2年次前期までの3セメスターにわたる発展的科目である。ライティングとプレゼンテーション指導を柱に、グループ活動を通じてライティング能力、プレゼンテーション能力、課題探求・解決力、論理的思考力、コミュニケーション力といった汎用的スキルの獲得をめざす。また、学生としての目標達成に向けた動機づけのきっかけとすることも狙っている。本報告は、2020年度入学生への授業を対象とした。新型コロナウイルス感染拡大の影響で対面授業が不可能となり、授業計画の大きな変更を強いられたものの、動画コンテンツの作成、グループ活動への遠隔会議システムの導入、リーダー学生の活用といった柔軟な対応によって、逆に学生の自主的な授業参加を促す結果となった。スキル面に関しては、論理的構成やパラグラフに対する強い意識づけが見られた。

キーワード：初年次教育，カリキュラム，学び合い，コラボラティブ・ライティング，
リーダー学生

1. 背景

初年次教育とは「高等学校から大学への円滑な移行を図り、大学への学問的・社会的な諸経験を“成功”させるべく、主として大学新生を対象に作られた総合的教育プログラム」と定義される（中央教育審議会，2008）¹⁾。大学のマス化・ユニバーサル化の進展に伴う学生の質と学びの質の低下が懸念される中、ともすれば初年次教育はリメディアル教育（補習教育）と混同されがちである。だが、中央教育審議会が定義する「成功」という一点において、リメディアル教育とは一線を画す。川嶋（2006）²⁾によると、ここで言う成功とは、「大学進学によって学生が目指している教育上の目標（大学卒業、あ

るいはそれに続く大学院進学）、また個人的な目標（就職など）の実現に向けて順調に進んでいること」を言い、「このような学生の成功の基盤となるのが大学『初年次』」である。川嶋の言説に従うなら、初年次教育にかかる授業プログラムの作成に際しては、成功に向けた動機付け、自律性という点も考慮すべきであろう。

初年次教育は、1970年代にアメリカの大学で First Year Experience（初年次体験）として始まり、日本では2000年代に入って急速な広がりを見せている（山田，2013）³⁾。ただ、初年次教育導入の要因となった学生の質の低下や若年人口の減少について、アメリカの大学が大学財政に直結する問題としてとらえているのに対して、日本の大学は「教育問題」

としてとらえている点で彼我の相違が見られる（濱名，2004）⁴⁾。その点を踏まえ、濱名は①大学生活への適応，②大学で必要な学習技術の獲得，③当該大学への適応，④学習目標・学習動機の獲得，⑤専門領域への理解・専攻分野の決定準備，⑥文化的素養のある教養人への招待といった，内容の多様性が初年次教育の特徴のひとつであると指摘する。

熊本保健科学大学が初年次教育を含めたカリキュラム再編の一環として2019年度より開講している全学必修科目「アカデミックスキル」は、濱名が掲げる初年次教育が包含する内容の多様性の相当部分を具現化した取り組みでもある。1年次前期から2年次前期まで、順に「アカデミックスキルⅠ」「同Ⅱ」「同Ⅲ」と、Semesterごとに科目を設定し、ライティングとプレゼンテーションを柱とする継続的かつ発展的な指導を企図した。

プレゼンテーションを含むライティング教育は、問題設定から課題解決までのプロセスを通じ、「論理的思考、コミュニケーション力、メディアリテラシー、創造性のレベルを少しでも向上させられる可能性」（鈴木・杉谷，2009）⁵⁾がある。自分の中で構築した意見を文章やことば等で外化する行為が、書く・話す力だけでなく、読む・聞く・調べる・感じるといったさまざまな力を駆使してなされる作業だからである。こうした能力の根底にあるのが、自らの頭で深く考える力である。例えば、ライティング指導においては、「書く」プロセスを通じ「問題の所在を見極める、それに応じて知識を蓄え整理し再構築する、説得力ある構成で外化する」力の涵養へと向かうことになる（渡邊，2018）⁶⁾。このような力の涵養は、内容を視覚化し論理的に整理・発信するプレゼンテーション指導においても同様に期待される。さらに、入学後の早い段階でのライティングとプレゼンテーション教育は、専門課程への橋渡しとしての役割も担っている。

ちなみに、2018年度の時点で、わが国の大学で初年次教育を導入している大学は97%に上る。このうちの97%が初年次教育にレポート・論文の書き方等の文章作法に関するプログラムを持ち、85%の大学がプレゼンテーション等の口頭発表の技法を身につけるためのプログラムを実施している（文部科学省，2020）⁷⁾。大学の学びにおいて、ライティングとプレゼンテーションの力が、それだけ求められていることの証左であろう。

本稿は2020年度入学生に対して2021年度前期（2年次生）までの3Semesterにわたり実施した「アカデミックスキルⅠ，Ⅱ，Ⅲ」（以下，Ⅰ，Ⅱ，Ⅲと略記）の実施報告である。期間中、新型コロナウイルス感染防止のため、対面での学習活動がほぼ不可能となったが、オリジナル動画の投入やグループ活動の導入といった当初計画を大きく崩すことなく柔軟に対応することができた。

2. 授業設計

2-1 スキル定着の試み

3Semesterにわたる一連のカリキュラムでは、大学での学びの入り口においてライティングおよびプレゼンテーションの基本的スキルの定着を図るとともに、論理的な思考力を身につけることを企図している。このため、Ⅰ-Ⅲでは、いずれも前半をライティング指導、後半をプレゼンテーション指導に充てた。すなわち、課題文章を作成し、その内容をスライドあるいはポスターにした後に発表する流れである。基本となる文章作成については、各科目とも論点設定・主張決定→アウトライン作成→執筆という流れを取り、必要に応じて文献引用を含めた文章作成上のマナー、表現法等の指導を組み込んだ。科目ごとに同じ流れを設定するのは、一方向的に知識として与えられたスキルを繰り返し使うことで、単なる「知っている」知識から「使える」知識へと自覚的に転換させることを狙ったものである。

このような、「使う」経験の繰り返しによるスキルの定着促進の試みは、Semesterをたどるごとに学習者の視点を広げながら課題の難易度を上げる形を取った。たとえば、表1に示すように、科目ごとに掲げた授業テーマは、視点を自分自身（Ⅰ）から次第に周辺世界（Ⅱ）へと移し、最後は社会とのつながりの中で自身の意見を形成し発信する（Ⅲ）という授業の狙いを端的に表したものである。これに伴い、ライティング課題も個人の中に題材を求めた800字程度の文章（Ⅰ）から発展させ、Ⅱではゲーム障害に関する症例を用い、関連文献を取り込みながら2000字程度の文章作成を求めた。さらに、Ⅲにおいては、数種類の新聞記事から興味のある記事を選び、独自の問題設定を経て2000字程度の意見文の作成を目指した。なお、Ⅲは地元新聞社の寄付講義として新聞社から派遣された講師が担当することになるが、Ⅰ，Ⅱ担当教員との緊密な連携のもとに授

業の継続性、発展性を担保した。

プレゼンテーションでは、各科目とも課題文章を視覚的にまとめる作業を通じ、ライティングで培った論理的思考の強化を狙った。IでPowerPointを利用したスライド、II、IIIではポスター作成を取り入れた。

表1 アカデミックスキル科目の授業テーマと課題内容

科目名・単位数(実施期間) ・対象=クラス・受講数	授業テーマ・課題内容
アカデミックスキルⅠ 2単位 (1年前期:2020年4-8月) 医学検査学科, リハビリテーション学科 =5クラス計250人	授業テーマ:自己を知る, 他者を知る 課題1:「私のお薦めは○ ○です」というテーマで 800字程度の文章を作成 課題2:課題文をスライド 化する(4分間のプレゼン テーションを想定)
アカデミックスキルⅡ 2単位 (1年後期:2020年10月- 2021年1月) 医学検査学科, リハビリテーション学科 =5クラス計248人	授業テーマ:世界を知る 課題1:ゲーム障害に関する 症例資料を基にテーマ を設定し, グループで 2000字程度のレポートを 作成する=コラボラティブ・ ライティング 課題2:グループで協力し て課題文の内容をポス ターにまとめ, 3分間の 口頭発表を行う
アカデミックスキルⅢ 1単位 (2年前期:2021年4-7月) 医学検査学科, リハビリ テーション学科, 看護学科 =1クラス計356人	授業テーマ:自分軸から発 信する 課題1:自分たちで選択し た新聞記事を基に形成し た意見・提言を, グループ で2000字程度の文章に まとめる=コラボラティブ・ ライティング 課題2:グループで協力し て課題文の内容をポス ターにまとめ, 3分間の 口頭発表を行う

2-2 グループ活動の導入

Iの一部、IIとIIIの全ての学習活動はグループ単位で行うことを想定している。Iではライティング、プレゼンテーションともに、全員に課題提出を求め

たが、プレゼンテーション課題の発表は3-4人のグループを編成し、グループ内での発表会を企画した。IIからは、ライティング課題、プレゼンテーション課題ともにグループで当たらせ、課題提出もグループごとに課した。

特に、II、IIIのライティング指導においては、複数の学生の手でひとつの文章を作成するコラボラティブ・ライティングを導入した。パラグラフごとに担当者を決め、最終的に一つの文章を完成させるこの手法においては、全てのグループ構成員が主張及びアウトラインを共有することで文章の作成過程をより効果的に学ぶことが可能になる⁸⁾。また、執筆前段階からグループ内討議を密にし、細部のすり合わせをする必要がある。このため、1人当たりの執筆量は少なくなるものの、思考の深化という点においては有効である⁹⁾。

2-3 リーダー学生養成と活用

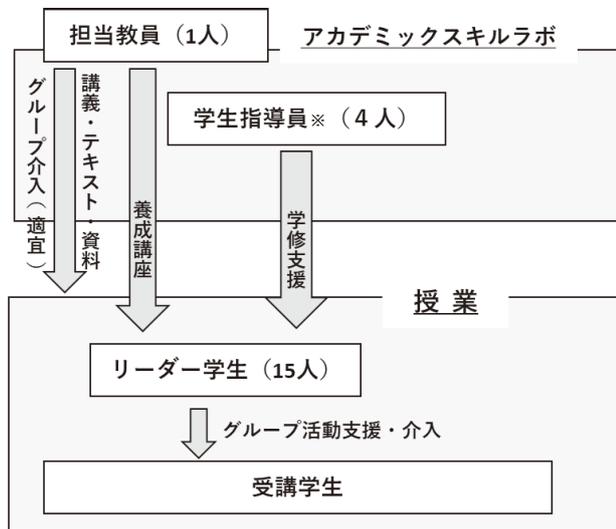
グループ内討議やアウトライン作成、執筆といったさまざまなグループ活動は、課題提出までのスケジュール管理も含め、基本的には学生の自主性に委ねた。対面で行うか、オンライン上で行うかという活動の形態も、最低限の時間確保を義務付けた以外は臨機応変に対応するように指示した。ただし、活動の質を担保するため、Iの段階で受講生の中からリーダー学生を募り、学内に設置された学習支援機関「アカデミックスキルラボ」(以下「ラボ」)ⁱにおいて授業内容にかかわる全てのスキルや知識に関する事前指導を施した後、ファシリテーターとして授業に投入した。

リーダー学生には、グループ内討議の活性化、論点形成やアウトライン作成時のアドバイスのほか、ラボが抱える学生指導員とともにオリジナルの教材動画の作成にもあたらせた。また、ファシリテートに行き詰まったリーダー学生に対しては、担当教員や学生指導員が随時相談に乗ることでモチベーションの維持を図った。

各科目における担当教員とラボ、リーダー学生、受講学生との関係を表したのが図1である。担当教員は、全体を統括しながら講義資料や全体スケ

ⁱ 学生のアカデミックスキル全般の向上を目的として2017年4月、熊本保健科学大学内に開設された。2021年度からアカデミックスキル支援センターに改組された。ライティング、プレゼンテーション、基本的なパソコン操作の指導を活動の柱としている。センターが養成した学生指導員が活動の中核を担い、スキル習得をめざす学生への個別アドバイスのほか、「アカデミックスキルⅠ、Ⅱ、Ⅲ」等の授業支援を行っている。

ジュールの管理を行うものの、あくまで黒子役に徹した。リーダー学生を含む受講学生を主役に据えることで、学びに対する自主性、自律性の萌芽を狙った。



※学生指導員：アカデミックスキルラボが養成したファシリテーター。授業支援のほか、ライティングやプレゼンテーションに関する助言を行う。

図1 「アカデミックスキル」授業支援の仕組み

3. 授業の実践

3-1 アカデミックスキルⅠ

アカデミックスキルⅠの授業概要は表2の通りである。第7回授業を除き、学内限定サイト(Active Academy Advance=AAA)を通じたオンデマンド授業の形態をとった。一義的には序論・本論・結論からなる論理的文章の型やプレゼンテーション資料の基本的な作り方に慣れることを最大の目標とした。この目標に従い、第3-6回授業のライティング指導では全員に比較的短い(800字程度)文章作成を課した。第8-13回のプレゼンテーション指導では4分程度の口頭発表を想定し、提出文章の内容をPowerPointを使ってスライドにした。スライド作成後に3-4人のグループを編成し、Skypeを使つてのグループ内発表会を課した。

オンデマンド授業に合わせ、アカデミックスキル学生指導員を中心に学びの意味について考えた「ガイダンス編」、プレゼンテーションの基本、Skypeを使ったグループ討議のやり方などを解説した動画資料計7本を作成し、授業資料として逐次配信した。

リーダー学生は、授業開始間もない5月に希望者を募り、15人を確保した。これらの学生を対象に、

ラボがグループ討議やプレゼンテーション資料作りに関する課外養成講座を開催し、受講生の資料作りのアドバイス役として活用した。

唯一の対面授業となった第7回授業では、学内のキャリア支援部門とタイアップし、就職活動や医療現場における「伝えること」の意味を説いた。「基調講義」と銘打った授業の挿入は、大学における学びを身近に引き寄せ、ライティングおよびプレゼンテーションを含めた学修への動機づけへと結び付けることを狙ったものである。

表2 「アカデミックスキルⅠ」概要(※は対面授業)

実施期間	2020年4-8月
授業内容	第1回 ガイダンス(1) 「アカデミックスキル」全体概要説明 第2回 ガイダンス(2) アカデミックスキルラボ作成動画(以下、「動画」=「学びの意味を考える」) 第3-6回 レポート作成※ 文章の基本構造/主張決定/アウトライン作成/執筆作業=一部オリジナル動画使用 第7回 基調講義※ 就職・実習支援課職員による「伝える力」と題した講義 第8-13回 スライド作成・発表 スライド作成法/作成作業/グループ編成およびグループ内での発表/動画(プレゼンテーションの基本/skypeによるグループ活動の方法) 第14-15回「アカデミックスキルⅡ」に向けた準備作業 授業概要の説明/文献講読/グループ内討議

3-2 アカデミックスキルⅡ

アカデミックスキルⅡの実践概要は表3の通りである。文献講読や引用の手法に関する指導を入れることで、客観的視点に基づく「事実の記述」¹⁰⁾を根拠とした論理的文章の作成に挑んだ。

Ⅰの最終段階(第14-15回授業)でゲーム依存症に関する症例および関連文献を提示し、Ⅱに入ると授業初期の段階(第2-4回授業)でグループによる文献講読を取り入れた。Ⅰに続き、全ての授業はAAAを利用してのオンデマンド授業となり、文章作成、プレゼンテーションにかかわる全ての作業をグループでの活動に委ねた。その最大の仕掛けが、ライティング指導(第5-12回授業)におけるコラボ

ラティブ・ライティングである。

オリジナル動画は、文献講読の進め方に始まり、ポスター作成の基本、リーダー学生による模擬発表等計7本を作成し提供した。

リーダー学生15人に対しては、開講前の夏季休業期間等を利用し、グループ討議、コラボラティブ・ライティングによる文章作成、ポスター作成および発表という一連の流れを経験させ、スキルアップを図った。なお、当初の計画ではポスター発表を予定していたが、対面授業が困難となり、グループ単位での発表用原稿の提出にとどめた。

表3 「アカデミックスキルⅡ」実践概要

実施期間	2020年10月-2021年1月
授業内容	第1回 ガイダンス(1) 授業内容説明 / Iの確認 / 最終課題の提示 第2-4回 文献講読(グループ討議) 動画(文献講読の進め方) / 主張決定 / 目標規定文作成 第5-6回 引用のマナー 文献要約文の作成(400字程度の文章作成) 第7-9回 アウトライン作成 グループ作業 第10-12回 執筆作業 グループ作業 / 推敲 第13-15回 ポスター作成 動画(作成法 / 発表法 / リーダー学生による模範発表) / グループ作業

3-3 アカデミックスキルⅢ

Ⅲは地元新聞社の寄付講義として開講され、新聞社からの派遣講師がラボと連携しながら授業を進めた。対象をI、Ⅱの医学検査学科、リハビリテーション学科から新たに看護学科も加えた全学科(356人)に拡大し、これを1クラスとして同時的に授業を行った(表1)。

Ⅲの授業概要は表4の通りである。対面授業はガイダンス的な性格が強い第1回のみで、残りの講義はクラウド型教育支援システムmanabaを通じたオンデマンド授業の形をとった。毎回の授業設定日には、新聞記事のコピーをはじめとした資料や動画コンテンツ(1本=リーダー学生によるポスター模範発表)などを提供した。

これまで学科ごとに編成していたグループは5-6人の学科混成に再編し、文章作成は引き続きコラボラティブ・ライティングを採用した。複数の新聞記事から各班でテーマを検討し、班ごとにアウトラ

イン作成を経て、分担執筆による2000字程度の意見文を提出してもらった。

後半のポスター作成(第9-12回授業)では、完成した意見文をもとに各班でポスターのほか、3分間程度の発表を想定した発表原稿も作成させた。当初計画では、第13-15回授業で全60班が参加しての公開ポスター発表会を予定していた。しかし、新型コロナウイルス感染拡大の影響で開催が困難になったため、代替策として全てのポスターをオンライン上で閲覧できるようにし、ピアレビューを兼ねた人気投票を行った。

リーダー学生は、Ⅱ終了後に1人が辞退したものの、14人は進級しても継続を希望した。これらの学生に対しては、開講前に課外の事前研修を開催し、授業担当者が新聞記事に関する説明や時事解説をまじえながら、グループ討議、コラボラティブ・ライティング、ポスター作成といった一連の作業の流れを経験させ開講に備えた。

表4 「アカデミックスキルⅢ」実践概要(※は対面授業)

実施期間	2021年4-8月
授業内容	第1回 ガイダンス※ 授業内容説明 / グループ編成 / 新聞記事の構造等 = 対面 第2-8回 文章作成作業 「事実の記述」と「意見」 / 論点と主張の決定 / アウトライン作成 / パラグラフの考え方 / 引用の意味・方法 / 各種表現法 / 推敲のポイント 第9-12回 ポスター作成作業 グループ活動 / 動画(リーダー学生による模範発表) 第13-15回 ポスター発表 発表用原稿作成 / ポスター人気投票 / 集計結果発表(総評)

4. 授業効果の検証

Iにおいては、ライティングおよびプレゼンテーションに関する最低限必要なスキルを、まず試してみることに重点を置いた。ライティングにおいては、序論・本論・結論という論理的文章の型こそ理解できていたが、パラグラフ同士、あるいは文同士のつながりに論理性を欠くケースが多く見られた。一方で、「一つの文には一つの情報」といった一文一義の徹底、主語と述語の関係への留意、曖昧表現の排除といった文(センテンス)作成に関するルール¹¹⁾

の定着が見られた。

Ⅱ、Ⅲで採用したコラボラティブ・ライティングは、Ⅰで困難に見えたパラグラフを単位とした論理構成を学生に強く意識させることにつながった。ただ、Ⅱの段階で提出された課題文では、同じ内容のパラグラフが並んだり、用字・用語の統一がなされていないかたりするケースが目立った。これが、自分たちの意見形成を伴ったⅢになると、主張のオリジナリティには欠けるものの、ほぼすべてのグループが執筆の拠り所となるアウトライン作成に時間をかけ、お互いの意思統一を図ろうという姿勢が見え始めた。このため、粗削りな表現を残しつつも、主張に沿った素材を適切に配し全体構成を意識したパラグラフが多く見られるようになった。

プレゼンテーションに関しては、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲともに前段のライティングとの相乗効果とでも言うべき現象が見られた。プレゼンテーションでは、作成した文章を簡潔にし、目に見える形でスライド化あるいはポスター化するわけだが、文章作成段階で芽生えた「構成」に対する強い意識がそのまま資料作りに現れる結果となった。特に一覧性が高いポスターにおいては、アウトライン段階での構成をレイアウトに直結させることができた。また、内容の大幅な短縮が求められる発表用原稿の作成においても、多くの場合、適切な再構成がなされていた。

I-Ⅲを通じ、最も定着しにくかったのは引用のマナーである。出典を明らかにするという点では、科目が進むにつれ明確に意識されているが、書誌情報を含む出典表記法への理解不足と思われるケースが目立った。

5. 考察

知識の使い回しによってスキル定着をめざした一連の科目は、デューイ（2004）が言うところの「経験の連続、成長、再構成」¹²⁾を企図したものである。経験の連続の過程で学生のモチベーションを維持するため、各科目で授業テーマを示しながら視点を次第に広げる手法をとった。学びの進展に応じて取り入れていった文献講読、グループ討議、引用、コラボラティブ・ライティング等は、難易度を上げながら「経験」を繰り返すことでスキル定着を図ったもので、同時に思考の深化を促す取り組みでもある。

当初、学生の中には他の科目で学んだ、たとえば福祉・医療関係の知識を、課題作成に生かすことを

ためらう者が目立ち、指導する側を戸惑わせた。このことは、知識を「使いこなす」経験の浅さを示唆するものと思われる。こうした学生が無自覚にはめた「知識のたが」をはずす上で効果的だったのが、Ⅱから本格化したグループ活動である。たとえば、個人的な作業という考え方が強い文章作成に協同学習の一手法であるコラボラティブ・ライティングを取り入れることで、学生は他人の頭を借りて考えることを経験し、それがあつ種の相互作用を引き起こすまでになった。

リーダー学生の活用による学生同士の「学び合い」の演出は、1人の教員が大人数の学生に対していかに効率的な指導ができるかという問いのもとに企図されたものでもある。リーダー学生の養成は、ラボが全面的に支援する形で行ったわけだが、当初からモチベーションは高く、最終科目のⅢまでほとんど欠けることなく、授業支援に取り組んだ。局面に応じたリーダー学生の投入により、ともすれば無軌道になりがちな学生のグループ活動に方向性を与え続けることができた。ただ、個々のリーダー学生の能力差からくるグループ支援の停滞も一部に見られ、そうした場合のラボを中心とした周囲の介入の在り方に課題を残した。

I-Ⅲにおいて、グループ活動を通じた自主性・自律性の萌芽が見られたことも特筆に値しよう。例えば、学科横断的な班編成で臨んだ最終科目Ⅲにおけるポスター作成・発表では、第11-12回授業期間に当たる2週間で最低2回のグループ作業の実施と作業内容の報告を義務づけた。これに対し、全60班のうち4分の1にあたる15の班が3回以上の活動を実施し、中には5回にわたる活動を報告する班も見られた。逆に一部の班では、自身が分担する作業を他の班メンバーに委ねるといったいわゆる「社会的手抜き」も見られたものの、極めて限定的であった。むしろ、3セメスターにわたる科目同士の連続性、発展性が、自主性、自律性、志向性といった学びへの構えを引き出した点で、一連のカリキュラムが専門教育への円滑な橋渡しにつながる可能性を示す結果となった。

実践期間中は、新型コロナウイルスの感染拡大により対面授業が制限され、授業や作業のほとんどはオンラインでの実施を余儀なくされた。これに伴い、予定していた口頭発表（プレゼンテーション）を中止したほか、授業資料や動画の投入を増やすなどの

手当てをしたものの、当初企図した授業の形を大きく崩すことはなかった。一方で、オンライン上でのオンデマンド授業や、「学び合い」を意識したグループでの協同作業は、新たな授業形態の開発へと目を向けさせる結果となった。

付記) 本稿における利益相反は存在しない。

参考文献

- 1) 中央教育審議会：学士課程教育の構築に向けて（答申），2008.
- 2) 川嶋太津夫：初年次教育の意味と意義. 濱名篤・川嶋太津夫編著，初年次教育—歴史・理論・実践と世界の動向. 1-12. 丸善，2006.
- 3) 山田礼子：日本における初年次教育の動向—過去，現在そして未来に向けて. 初年次教育学会編，初年次教育の現状と未来. 11-27. 世界思想社，2013.
- 4) 濱名篤：初年次教育とリメディアル教育. 大学教育学会25年史編纂委員会編，あたらしい教養教育をめざして—大学教育学会25年の歩み—未来への提言，217-222. 東信堂，2004.
- 5) 鈴木宏昭・杉谷祐美子：レポートライティング教育の意義と課題. 鈴木宏昭編著，学び合いが生み出す書く力—大学におけるレポートライティング教育の試み，1-14. 丸善プラネット，2009.
- 6) 渡邊淳子：ライティング指導のためのルーブリック評価表開発—均質なパフォーマンス評価の試み. 熊本保健科学大学研究誌，15:101-107, 2018.
- 7) 文部科学省：平成30年度の大学における教育内容等の改革状況について，2020.
<https://www.mext.go.jp/content/20201005-mxt_daigakuc03-000010276_1.pdf>
2021年8月19日閲覧.
- 8) バークレイ，E.F.，クロス，K.P.& メジャー，C.H.，安永悟監訳：協同学習の技法—大学教育の技法. ナカニシヤ出版，2009.
- 9) 渡邊淳子：文章作成指導におけるコラボラティブ・ライティングの効果. 保健科学研究誌，14: 121-128, 2017.
- 10) 木下是雄：レポートの組み立て方. 筑摩書房，1981.
- 11) 渡邊淳子：大学生のための論文・レポートの論理的な書き方. 研究社，2015.
- 12) デューイ，J.，市村尚久訳：経験と教育. 講談社，2004.

(令和4年1月11日受理)

Report on Teaching Academic Skills I, II, and III: Compulsory Courses for All Students

Junko WATANABE

Summary

This paper reports the teaching of “Academic Skills,” which is a series of mandatory courses that has been offered as a part of the first year experience at the Kumamoto Health Science University since the academic year of 2019. Academic Skills is a course series, spanning three semesters, from the first term of the freshmen year (Academic Skills I) to the first term of the sophomore year (Academic Skills III) . It primarily focuses on writing and presentation. However, in addition to these, students also learn general skills such as problem exploration, problem-solving, analytical thinking, and communication. These courses also aim to motivate students to pursue their personal goals. This report encompasses the units I, II, and III, offered to students who enrolled in 2020. We drastically revised our initial lesson plans because face-to-face classes could not be provided amidst the COVID-19 pandemic. However, students participated proactively after the implementation of various flexible measures, such as video content creation, teleconferencing system application for group activities, and student leader appointments. Furthermore, students expressed a strong interest in the skills of logical construction and paragraph writing.